

## 絵本太功記

六月七日 杉の森の段

ツナエ 撰化随縁真実せんけしじつに、無量の恵み洩れざれども、仏敵ぶつてき猛威まういの春長に世を狭められ鱸重成ろしげなり、無念ながらも杉の森砦じりでを構へゆくしくも、寄せ手を防ぐ唯一心ゆいいつしん、矢叫びやさけの音聞おときこの声、天地に満ちて動揺せり。

かゝる險しきその中に、媚き集ふ腰元共、戦に馴れて気は張弓はりゆみ、櫛鉢巻腰刀たすきはちまき、さすがゆくしき身の備へ、中に小笹が才発顔。

小笹 「イヤノウ浪江、なんとマア騒がしい世界ではないかいの。切つたくと切つゝはつゝを世渡りに、まだ仕足らいで春長殿、慶覚様を相手に取り、憎てらしい戦事」

浪江 「サイノウ、追つ付け如来様の罰が当たり、首がころりと飛ぶであろ」

と殊勝なり。

かくと洩れ聞く一間より、孫市が妻の雪の谷、我が子の手を引きしとやかに、出づる姿もおのづから、思ひある身の打ち萎れ、

雪の谷 「ほんに主なり家来なりと、思ふてやさしいそち達が志、聞く嬉しさにいと猶、悲しき夫のお身の末、どうなる事と自らが、心の内を推量してたもやいのう」

と、ありければ、

腰元はじめ士卒共、顔見合はせて詞なし。

娘松代は母の顔、打ち眺めく、

松代 「コレ申し母様、お前は何をむつかるぞ。同じ様に皆までも何を泣きやる。早うとゝ様や弟の重若を呼びまして来てくれやい。この間の清書をお目に掛けて、誉めて貰ひたいはいのう」

雪の谷 「オ、誉めて貰ひたかろう。そなたよりこの母が逢ひたさは山々。暫しが間も母の傍、得離れぬアノ重若、定めて泣いてばつかりあるであろ。可愛の者や」

と言へば

兵卒口々に、

兵卒 「オ、サ飛ぶともく、一向一心に固まつたる

我々。ことさら御主人喜多の頭様の軍配、石山に於いても度々の勝ち戦。ヤモ負ける事は権輿もない事。

残り多いは王様の御挨拶、頭の役でおとなしく丸う納めて慶覚様が、石山の砦を引き払ひ、この杉の森へ御陣変へ。性懲りもなくまた寄せ掛けた尾田の大軍、どつと寄せても不可思議光、如来のお力にや叶ひませぬ、ぢやないかいな」

腰元 「アイナア」

腰元 「アイナア」

腰元 「ア、アイナ」

兵卒 「オツト待つたり。叶はぬ序に、おいといは若旦那孫市様。尾田と和睦が破れたばかりに、お使ひの落度ぢやと、てゝ御様の御勘当。なんと可内、お詫びの願ひを一統にしてみる心はないかいやい」

と、おろく涙惣々が、啜り上げたる水洩も、忠義の端

と喰ひ縛り、泣く音を包む雪の谷が、心の内ぞ切なけれ。

襖のあなたに重成が、高らかに咳払ひ、

雪の谷 「さては舅君のお出でなるぞ」

と、言ふに

心得腰元が、席を下がれば

雑兵共、地に鼻着けてかつ跪ひ、

待つ間程なく悠然と、立ち出づる鱸喜多の頭、不興氣に辺りを見廻し、

重成 「ヤイ女ばら、この所に用事はない、次へ立て。軍卒共も何をうつかり、要害を頼みに搦め手の守り怠るは一大事。早く罷つて心を付けよ。サ、行け、行け」と追つ立て遣り、

重成 「イヤナニ嫁女。そなたにも言ひ聞かし、悦ばず事があるてや」

雪の谷 「アノ、私に悦ばず事があると御意遊ばすは。

ム、夫孫市殿の」

重成 「テサテ、またしても不吉者の倅が事、左様の事で

おりない。当月二日の曉に、天文の考みしところ、東に当たつて白氣自然と立ち昇る。これ即ち、敵の大将春長が腹心と頼む、勇者の内に変心の者あつて、事を破るの前表。今日まで口外せざれども数日の籠城、お身も定めて心労と思ふから、安堵させんため申し聞かす。見よく、追つ付け世を廣う、足利の正統たる慶覺君の御代となさん。なんとこの上もなき悦びではおりないか」

と、未前の察す明智の眼力、

こなたは一途に夫思ひ、『よき折柄』と擦り寄りて。

雪の谷「イヤモウ、お嬉しい段ちやござりませぬ。ガドウぞなろう事なら、その白氣とやらが立ちました、孫市殿の御勘当が赦りますといふ知らせなら、ホンニマア、どの様に嬉しいう存じませうぞ。憚りながら慶覺様と御一所に、どうぞ世に出られます様に、親御のお慈悲お情けで」

と言ふを

打ち消し、

重成「アレまだしつこい。かゝる目出度き折柄に、由なき戯言は聞きたくない。お身も孫を連れて部屋へ行きやれ。エ、何をぐづく、早々立ちやれ」

と嘯み付けられ、なんと詮方投げ首し、娘松代を伴ひて、しをく立つて入りにける。

後に重成たゞ一人、立ち上がつて通路の鈴、引き鳴らせ

ば

一間の御簾、さつと小姓が掲ぐれば、

念誦他事なき慶覺君、

慶覺「重成が音づれ、何事かあるやらん」

と、仰せに

『ハツ』と頭を上げ、

重成「今朝より御機嫌を伺ひ奉らんと存ずれども、敵の朝がけ、短兵急に寄せたれば軍配に暇なく、一泡吹かせ味方の勝利。攻め口を退き候へば、一息の間と漸う只今御前へ伺候。無礼の段は御高免」

と、敬ひ深く述べければ、

慶覺「誠忠俊父の一人、時に合はねば、この程より

の心労推察せり。兄義輝君は三好松永がために亡び給ひ、今また我れは春長がためにかくの如し。よしなき命存へて、万民塗炭の苦しみといひ、諸卒の命を失はんより、早く我が一命を断ち、万死を救ひ得させよ」

と、御目を閉ぢて称名を、唱へ給へば

重成も、君の恵みの有難涙、胸に押さへて気色を変へ、

重成「チエ、言ひ甲斐なき御仰せ。それ戦は和にあつて衆にあらず。馬洗厩養に等しき尾田の弱兵、何程の事やあらん。凱歌を上ぐるは瞬く内。君にもしろし召す如く、国大いなるといへども戦ひを好めば必ず亡ぶと、近くは武田勝頼、父信玄まで、その威隣国に並ぶ者なく猛虎の如く、諸侯も恐れ候へども、勇に誇り武に慢じたる太郎勝頼、累代の武名も一時に朽ちぬ。春長とてもまつその如く、御心弱くて叶はじ」

と、諫め申せば

慶覺法師、打ち領かせ給ひつゝ、

慶覺「重成来たれ」

と御座をば立たせ給へる、その所へ

大息ついで鷺森八郎

鷺森「御注進」

と手を突けば、

人々『如何に』と仰せの下、

鷺森「されば候、戦は味方の勝利なれども、力責めには叶はじと、数千の車に焼草を積み乗せて櫓々のその下へ、山の如くに積み重ね、たゞ焼き打ちに」

と言はせも立てず

重成「ヤア馬鹿々々しい、何の戯言。その荊柴こそ身が申し付けたる一つの計策。御大将の御前なるぞ。

イヤサ粗忽の注進、エ、早く立て」

と、わざと怒りの一言も

知らで鷺森八郎は、拍子抜けく引き返せば。

重成「イヤ御入り」

と八方に、心を配る重成が

底意を汲みて慶覺君、奥殿差して

「三重 入り給ふ。」

夏の日の、長きも我れを恨むなる、物思へとや夕暮の、空を待ちけり孫市が、肩にしつかり鎧櫃、人目を忍ぶ陣笠の、歩に裏したる佛は、昔に代はる勘当の、身は尚更に心の隔て、なんと詮方切戸口、忤むこなたの茂みより。

忍び出でたる大の男、辺りうそく窺ひ足、『今宵の内に重成が首討ち取らん』と独り笑み、奥を目掛けて忍び行く。

後の方より孫市が

孫市「曲者遣らぬ」

と弱腰を、むんずと組んで引き戻す、

男「シヤ猪口才な」

と振り解き、直ぐに抜き打ち刃の光

かひ潜つて抜き合はし、手練の切つ先はつしく、打ち合ふ刃音

『何事』と、手燭片手に立ち出る雪の谷、火影を覆ひ

物蔭に、息を詰めてぞ守りゐる。

庭には二人が上段下段、

飛鳥の働き孫市が、難なく曲者切り倒し、乗つかつて留めの刀。

血押し拭ひ刀を鞘、納める丈夫死骸の懷中、探る手先に取り出す一書、『さては』と月に透かし見て、

孫市「ム、すりや当月二日に春長父子、光秀がために亡びしとな。チエ、心地よや嬉しや」

と、悦び勇む

後ろには、紛ふ方なき夫の声、飛び立つばかり走り寄り、

雪の谷「逢ひたかつた」

と緋り付き、嬉し涙ぞ先立てり。

夫もさすが夫婦の愛情、やうち潤む目を瞬き、

孫市「真や、飽かぬ夫婦が銘々に、倅を連れて思はぬ離別。父の勘気を蒙りしも、暴悪非道の尾田春長、約を変ぜし故なれば、何卒彼奴が首討ち取り、親人の実検に備へなば、勘当詫びの綱にもと、心は矢猛に逸れ

ども、『倅重若を召し連れては足手纏ひ』と未練に

も、子に引かされて送る月日。鉄砲疵にて脛さへも、思ふに任せぬ片輪者。武運に尽きし我が身の上。せめて御主君親人のお役に立つて死なんものと、覚悟極むる今日只今。死後に頼むは二人の子供、心得たるか」

と夫の詞

聞くに女房が泣き出だす、

その口押さへて、

孫市「こりや、親人のお耳に入らばかへつて妨げ。イデ

倅を手渡し」

と、片へに直せし鎧櫃、蓋取り退くれば

重若が、

重若「かゝ様、ノウ」

と走り出で、緋り嘆けば

母親も、胸に涙の満汐の引くや血筋と

奥よりも、姉の松代が声聞き付け。

松代「おとゝ様のお帰りか、重若も戻つてか、嬉しいく。早う遊ば」

と手を叩き、悦ぶ姉弟

雪の谷が、膝に引き寄せ声曇らせ、

雪の谷「オ、嬉しかろく。なんぼうその様に悦びやつても、久しぶりでお目にか掛かつたと様は、腹を切らねばならぬという。コレ孫市殿、これを見てかいのう。なんにも知らぬ二人の子供、お前は可愛うござんせぬか。この姉弟を振り向けて、死ぬる覚悟を極めたとは、あんまり気強い胸欲な。武士が立つても廃つても、死なさぬくく」

と、掻き口説くのも忍び音に、奥へ憚る憂き涙。

『道理』と知れど声に角立て、

孫市「ヤア未練至極のその吠え面。弓矢取る身の切腹はこの身の本懐。今計らずも寄せ手の大将、是角六郎を討つて捨て、懷中の一書を見れば、『都本能寺に於て春長父子、光秀がために討死』と、春孝よりの知らせの密書。この騒動に寄せ手の奴ばら、一旦囲みは開くとも、再び寄せんは必定たり。危急を救ふはこの孫市。君と父との命に代はり、首を即ち久吉が陣所に送

りとを乞はゞ、元来寛仁大度の真柴、よもや違背は致すまじ。使ひは倅重若丸、兼て認め置いたる一書、かくまで思ひ込んだる某、妨げなす不所存者。こりや、こりや二人の子供、こゝへ来よ、こゝへ来よ。姉弟共にとゝが子か、また母が子か、言ふて聞かさば賢い者」

と、撫でつ擦りつ尋ぬるも、胸に無量の思ひある、心は知らで弟の重若、

重若「コレとゞ様、わしはお前の子でござるはいの」

孫市「なんぢや、とゞが子ぢや、オ、よく言ふた、出かいたなあ。サ、姉の松代はどうぢや〜」

と、問へど

年だけうぢ〜と、母に気兼ねの言ひ兼ねれば、

孫市「ム、返事のないはかゝが子か。我が子でなくば出て失せう」

と、叱り付けられ

泣く〜も、

松若「なんの、かゝ様の子ぢやござりませぬ、とゞ様の子

でござります」

孫市「ム、とゞが子ならば、身が言ひ付ける事背きはせまい」

松若「アノ、親の言ふ事聞かぬ者は不孝者ぢやと常々からのお叱り。どんな事でも聞きます。ノウ重若、そなたも言ふ事聞きやるかや」

重若「アイ、よう言ふ事を聞くはいのう」

孫市「ム、テサテうい奴〜。しからば申し付ける役目がある。今、とゞがこの短刀を腹へ突き付けたらばな、この刀と脇差で身が首を引き切り、この一書を添へて久吉殿へ持参せば、この上もなき孝行者。合点がいたか」

と細やかに、言ひ教ゆれば

驚く母、睨み付けられ喰ひ縛る、

親の心は知らぬ子の、訳も七つ子重若丸、

重若「そんなら、とゞ様の首をこの脇差で切ると、孝行になりますかや」

孫市「オ、なるとも〜、日本一の大孝心」

重若「コレ、姉様も合点かや。サア早う腹切つて下され」

と言ふに

堪らず母親が、我が子引き退け、

雪の谷「エ、忌はしい子供ではあるはいのう。コレ孫市

殿、いかに望みが立てたいとて、何弁へないこの子供に、親を殺せと教へる人が、またと世界にあるかいの。夫や我が子を安穩に置きたいばかりにとやかくと、心を尽くす女房を思はぬ仕方情けない。親の別れも身の科も弁へ知らぬ仏様、鬼にせうとは胸欲な。せめてこの子が生先を、見届けるまで生きてゐて下さりますが親の慈悲。頼むはいの」

とばかりにて、訳も詞も涙川、膝に漲る風情なり。

孫市「ヤア益なき繰言聞きたくない。三千世界に子を思はぬ親があらうか、うつけ者。さほど倅にこの首を討たし難く思ひなば、子供に代つて介錯せよ」

雪の谷「サア、それは」

孫市「得心なくば縁切らうか」

雪の谷「ぢやと言ふて、これがマア」

孫市「ヤア未練至極のその吠え面。所詮介錯思ひ寄らず。見下げ果てたる女め」

と、取つて引き寄せ提げ緒の早縄、庭木の杉に荒々しく、結ぶ妹背の解け口。

焦がるゝその身は梢の猿、腸を断つ憂き思ひ、見る目も哀れ母親が、

雪の谷「コレ〜松代、重若もとゞ様の両の手に取り付いてゐやゝ。必ず離してたもるな」

と、焦れど夢か現なき。

夫は『今を最期ぞ』と、諸肌脱げば、弟の重若

重若「とゞ様、もうかや」

孫市「オ、サ、今が親への孝行時」

と、言ひつゝ短刀我が腹へ、ぐつと立てばぱつと散る、唐紅に目も眩み心も消ゆる雪の谷が、闇路を辿る思ひにて、正体もなく伏し沈む。

重若「ヤレその刀引き廻すな。言ふ事あり」

と父重成、一間より立ち出で、

重成「ホ、天晴れ忠臣、良くしたり。今こそ勘当赦しくれる。これをこの世の思ひ出に、心静かに最期を遂げよ。とは言ひながら二人の孫、親の死別も夢現、さぞ成人のその後は、嘆くであらう悔みをらう、と思へば不憫いや増して、我れは老木の末近く、頼りとするは母の親、酷い祖父ちやとこりや、恨んではしくれるなよ。我れとても骨肉の倅を見殺す胸の内、どの様にあらうと思ふぞいやい。チエ、是非もなき次第や」

と、胸に湯玉の湧き返る、

親の思ひの有難涙、

見上げ

見下ろす一世の別れ

手負ひは涙押し留め、

孫市「ハ、有難き父の恵み。忠孝全く望みは足りぬ。

サア重若、松代、最前とゝが申し付けたる役目は只

今。サア早く、早く」

雪の谷「ア、コレく、必ず切るまい。切つたらば母が

灸を据ゆるぞや」

と脅せば

さすが子心に、控ゆる手先

孫市「ヤア、詞背くと子でないぞ」

松若「エ、とゝ様の御用を聞くとかゝ様が叱らつしやる。そのかゝ様はあの様に縛られてゐやつしやる。コレ重若、かゝ様のあの縄、解いて上げてたものう」

重若「サア、それでもあの様に睨ましやるもの」

雪の谷「オ、とゝ様が叱らしやつても大事な。この縄解いてたものう。コレ申し舅御様、同じ様に脇見せずと、なぜ止めて下さりませぬぞ。現在孫を親殺しにするが情けか慈悲かいのう。この縄解いて下され」と頼む嫁より

頼まるゝ、舅が胸の苦しさを、堪ゆる辛さ渋面は、涙に増さる思ひなり。

『かくては果てじ』と孫市は、我が子の腕先持ち添へて、しつかと当つれば

頑是なく、共に力身で、

始終見届け重成が、目に持つ涙押し拭ひ、

重成「ハア、生者必滅の理。今日の前に見るも夢、

せて夫の切首に、暇をひを」

と立ち上がり、縄解きほどけば

雪の谷は、その儘首にしがみ付き、

雪の谷「コレイノウ孫市殿、果敢ない姿に、果敢ない姿にならしやんしたのう。覚悟故とはいひながら、いと可愛い姉弟に、さぞや心が残るである。魂魄去らずば今一度、物言ふてたべ孫市殿。我が夫のう」

と押し動かし、正体涙の声を上げ、

雪の谷「家を忘れ身を忘れ、討死するは武士の習ひと覚悟しながらも、得諦めぬは女子だけ、お赦しなされて下さりませ。長い別れと知らぬ子の、常の遊びか何ぞの様に、親の首をばむごたらしい。切るが手柄になるといふ教えは外に情けない。いかなる宿世の報ひぞ」

と、口説き立てたる恩愛の、

心は一つ重成も、瞬きしげくはらくく、涙は雨か夕立の、車軸を飛ばす如くなり。

松若「とゝ様、かうかや」

孫市「オ、そうぢや、出かす、出かす」

も一世の別れ

二世の名残りと雪の谷が、消ゆる間を待つ夫の命、

雪の谷「神も仏もない事か」

と、乱るゝ心乱れ髪、血汐争ふ血の涙、

上には父が称名の、声諸共に鈴の音、

慶覚君は他念なく、

慶覚「なむあみだぶ、なむあみだぶ」

南無阿弥陀仏の回向の恩徳広大、不思議にて往相回向の、利益には還相回向に回入せり。

声は『如来の迎ひぞ』と

孫市「えい」

重若「えい」

二人「えい」

と孫市が、首は前にぞ落ちにけり。

『ワツ』と恐れて飛び退く子供、

母その儘打ち倒れ、前後不覚に嘆き伏す。

折しも吹き来る風につれ、響く貝鐘攻め鼓

『またも敵や寄するか』と、驚く雪の谷

騒がぬ老人、

思ひ掛けなくかしこより、

清秀「足利の正統たる慶覚君を御迎ひのため、中川清秀  
参上せり」

と呼ばゝりく、入り来る清秀

喜多の頭『クワツ』とせき立ち、

重成「ヤア、和議を破りし無道の春長、その禄を喰む中  
川瀬平、納め過ぎたる袴衣服、御迎ひとは

ナ、ハ、ハ、ハ、なんの戯言」

清秀「ホ、ハ、一旦の憤りは尤も至極。この度の合戦

は御舍弟春孝殿。事を計りし礼を乱す。さるによつて

真柴久吉、内意を以て立ち越えしは、密かに都へ供奉

せんため。早や御用意」

と言はせも立てず、

重成「ヤア、逆賊光秀がために自滅せし春長父子、知る  
まいと思ふかや。石山方に名を得たる鱸喜多の頭重

成、眼は日月、及ばぬ事を」

と決め付ければ、

清秀猶も詞を尽くし、

清秀「なるほど、推量の如く当月二日、都本能寺に於て

主君の横死、愁ひに沈む我々、偽りのあるべきや。取

り分け子息孫市殿、死を以て久吉殿へ願ひの一条、今

より一子重若丸、父の忠義を頭に戴き、二代の鱸孫

市と名も改める両家の和睦。慶覚君の御本願照らすも

法の道広く、やがて目出度き栄えを」

と、情けの詞に

疑念も散じ、

重成「ハ、誤つたりく。か程厚志の真柴、中川。

倅が願ひ我が君の、法の門出一時に開け、この上もな

き我が悦び。コレく嫁女、孫が手柄は二代の忠臣、

嘆きの中の悦び」

と、舅の詞

聞くに付け、いと涙に雪の谷が。答へもさらに泣くば  
かり。

家来「早や御立ちの刻限」

と、追々警固の諸軍勢、

見るより重成手を打つて、

重成「万事に馴れし清秀殿、イデ我が君へこの様子、申

し上げん」

と立ち上がれば、

慶覚「イ、ヤ聞くまでもなし、疾くより慶覚これにあ  
り」

と、しづく歩み出で給へば、

『ハツ』と恐るゝ二人の勇士

慶覚君は御衣の袖、絞り給ひて、

慶覚「いかに方々、孫市が忠死により万死を出でしも

仏の恵み、久吉が情けの計らひ。まつた清秀、とやら

んが志、過分至極」

と宣へば、

清秀猶も敬ひ深く、

清秀「コハ有難き君の御詫。この上はお心置きなく早  
や鶏鳴に程近し。いざ御発駕」

と勧めに

君は、下り立ち給へば、

重成「ヤレ暫く、御門出を寿きの孫めが一差し、御

上覧に入れ奉らん。嫁女、常々教えし扇の一手、早

く、早く」

と舅の詞。

涙ながらに取り上ぐる、鼓の調べ

重若が、

重若「祖父様、謡を謡ふてや」

と、扇をしゃんと、身の備へ。

重成「へあら目出度や末広の、君の栄えは万々歳と祝

しけり」

拍子につれて幼子の、奏で祝する末広の、

その一曲は末の世に、名を留めたる鱸が踊り、因縁かく

と知られたり。

清秀「いざ御立ち」

と清秀が、詞に

振り出す行列の。

押さへは二代の鱸孫市、武士の鑑となる鐘の、声諸共に  
明けて行く、夜も白々と白鷺の、森を離れて飛び交ふ  
も、君の栄えを白鳥の、神の応護と勇み立ち、都の空へ  
と、供奉しけり

(2025. 9. 4)